

中国人留学生保護者の意識調査からの考察 一宝塚大学の調査結果を中心に―

A View from the Attitude Survey of Parents of Chinese students
Focusing on the Survey Results of Takarazuka University

李 春 Chun Li
宝塚大学東京メディア芸術学部

抄録

中国人の日本留学スタイルは保護者の精神的な支えや経済的な援助をあまり受けられない「放任留学」から保護者の精神的な支え及び経済的な援助を多く受けている「援助留学」へ転換している。通信手段の発達及び保護者の経済力の向上がその転換を促す要因だと考えられる。特に無料SNSは保護者と留学中の子どもとのコミュニケーションの道具となると同時に、大学と保護者の連携にも役に立っている。大学はSNSを通じて教育方針、教育内容、子どもの現状などの様々な情報を保護者と共有しながら、必要に応じて留学生の教育における保護者の協力を求めることができる。保護者との連携は、留学生の主体的な学習力の向上につながる可能性がある。

1. 問題の提起

宝塚大学東京メディア芸術学部（以下本学と呼ぶ）の留学生教育の特徴の一つは、大学と保護者の連携が挙げられる。

本学の留学生は中国人がメインのため、2018年度から、中国人に幅広く使用されている無料通信アプリWeChat（LINEの中国版に相当するもの）の大学公式アカウントを作成し、学年ごとに留学生グループ及び保護者グループを作り、全留学生及びその保護者をそれぞれのグループに追加した。留学生が無事に学修を収めるためのサポートとして、大学の各種お知らせや活動報告などを留学生及び保護者に一斉送信し、情報を留学生と保護者の手元に確実に届けながら、大学の名前を広く宣伝してもらうと同時に、留学生教育における必要な場合には保護者の協力を求めるということが主なねらいであった。四年間にわたり実践した結果、

当初の狙いがほぼ達成したと見られる。この四年間において、違法行為などに加担、もしくは巻き込まれた留学生はおらず、体調不良のため2名の退学者がいたものの、全体から見ると、多くの留学生はほぼ無事に卒業か進級を認められている。

しかし、卒業や進級が認められているからと言って、留学生の学修状況は決して望ましい結果に達したとは言いきれない。例えば、日本語学習においては、日本語力を向上する必要があると自覚しながらも努力する傾向が見られず、単位の取得に支障を与えない程度の日本語力を持っていれば良いと考えている留学生が多い。例え大学が日本語力向上の学習環境を整備し提供しても利用する人が少ない。そして日本留学の内容の一つだと思われる日本人との交流や日本文化理解促進のためのイベントへの参加に対しても、多くの留学生は積極的な態度や行動を見せているとは言いがたい。卒業に

必要な単位を取得して、大学卒業証書を手に入れば良いと考えている留学生が決して少ないとは言えない。

なぜ中国人留学生はこのような考えを持っているのか。このような日本留学の意味を矮小化した考えを正す策があるのか。中国人留学生の日本留学の質を高め、彼らの主体的な学習（本報告では、自ら積極的に学習に取り組むということを目指している）意欲を喚起するために上記の原因究明及び対応策が不可欠となっている。

そこで、中国人留学生を育てた保護者たちは自分の子どもをどう思っているのか、来日する前に子どもとどのように向き合っていたのかを調査すれば何らかの解決の糸口が見つかるかもしれないと考えようになった。新入留学生に対して、毎年留学生ガイダンス時に、日本語能力、学習能力、経費支弁能力などの現状についてアンケート調査を行ってきたが、保護者を対象とするアンケート調査は一度も行っていない。そこで、中国人留学生保護者はどのような人なのか、保護者の目に映った子どもはどのような学習、生活習慣を持っており、どのような学習能力を持っているのか、そしてなぜ彼らは日本留学を選択したのか、来日後に親とどのような形でコミュニケーションを取っているのか、そして保護者の経済力、親子関係、留学準備、大学選択への関与、子どもへの期待や心配事などの現状はどうなっているのか、その現状に併せて対策をとる必要があるかを解明するために、本学に在学している中国人留学生の保護者にアンケート調査を行うことにした。

2. 先行研究

日本国内における中国人留学生保護者に関する調査研究は、筆者の調べた限りでは、まだ行われたことがない。

先行研究を総観してみると、今までの日本国

内における中国人留学生に関する研究は、主に松原愛（2013）、費曉東（2013）、張文青（2018）などの日本語教育研究、葛文綺（1999）、張梅（2012）、李敏（2016）などの日本留学の目的的研究、周宇磊（2017）、殷夢茜・青木紀久代（2018）、丁思琦・松田英子（2020）の日本文化への適応研究、呉曉良（2017）、李文・陳全（2020）の交友関係研究、村瀬・北島・山内（1996）、藤媛媛・林萍萍（2021）の心のケア研究、井上恵（2016）の日本での就職研究という六種類に大きく分けることができる。しかし、それらの研究は中国人留学生本人に関する研究であり、留学生の保護者に関する分析にはほとんど触れられていない。

他方、日本国内における日本人学生の保護者に関する調査研究は、頻繁に行われており、全国大学生協連とベネッセ教育研究開発センターの調査研究が代表的である。

全国大学生協連は2010年度から毎年新入生の保護者を対象に「受験から入学までにかかった費用」、「保護者の意識」などについて調査し、報告書を提出している。ベネッセ教育研究開発センター（2012年）も大学選択へのかかわり、大学生活への期待、保護者と大学のかかわり、子ども・大学生活へのかかわり、就職・進路選択へのかかわり、海外留学への意識などについて大学生の保護者の意識調査を行っていた。しかし、これらの調査研究は日本人学生保護者に関する調査研究であり、中国人留学生保護者については全く関与していない。

このことにより、中国人留学生保護者に特化した本研究の主な意味は、この在日中国人留学生教育研究における空白を埋めるところにあり、本学の教職員に中国人留学生保護者の現状に応じて中国人留学生に対する指導方法を考える根拠を提供するということにあると考えられる。また、本調査で得た中国人留学生保護者のデータは、現在の中国人留学生保護者の現状を示す日本での初めてのデータだと見られ、中国人留学生保護者の実態を把握す

る貴重なデータだと考えられるため、本学のみならず、美術系中国人留学生を受け入れている他大学や中国人留学生教育の研究者にも教育や研究の参考やヒントを与えられるかもしれない。

本稿は中国人留学生保護者に対する調査方法を述べてから、調査結果を示しながら解析して、最後に総括するという文脈に沿って議論を展開していく。

3. 調査方法

今まで、中国人留学生保護者を対象とする大規模アンケート調査は非常に困難だと思われてきた。中国人留学生保護者の連絡先を把握する難しさ、アンケート結果を回収する難しさ、保護者の協力を求める難しさ、そして言葉の壁などが調査困難の主な原因だと挙げられる。しかし、本学はWeChatを利用しているすべての中国人留学生及びその保護者を大学の公式WeChatアカウントに友達追加をしており、常時留学生保護者と中国語でコミュニケーションを取っている専任教職員がいるため、全学の中国人留学生保護者を対象とする大規模アンケート調査の実施は困難ではなかった。この調査は、本学に在学している中国人留学生保護者の現状を把握し、本学の中国人留学生に対する教育内容、指導方法、学習環境、奨学金授与などの問題を研究し改善する根拠を収集することを目的としている。調査期間は2021年11月19日から26日の一週間とした。調査対象は本学に在学している学部及び大学院中国人留学生193人のうち、大学の公式WeChatアカウント保護者グループに加入している中国人留学生保護者167名である。調査方法はMicrosoft Formsを用いて中国語でアンケート項目を作成し、上記の調査目的を明記すると同時に、個人情報特定されないこと及び教育研究以外の目的に使用しないことを強調したうえで、FormsのリンクをWeChatで保護者に送付し無記名で回

答してもらった。その結果、167名の保護者のうちの145名が回答し、回答率は87%であった。その回答結果に基づいて、さらに詳しく把握する必要があると思われる一部の問題について、WeChatを通じて一部の保護者に対してインタビュー調査も行った。

アンケートは主に以下の10項目で構成されている。①年齢、学歴、職業、出身地などの基本属性、②世帯収入、仕送りの詳細などの経済力、③子どもと連絡を取る方法、時間、内容などのコミュニケーションの方式、④日本留学への提案、理由、賛否などの日本留学への関与状況、⑤来日前の子どもの日本語学習状況、読み書きの状況などの学習能力、⑥来日前の子どもの趣味、⑦子どもの進学への関与程度、⑧入学後の子どもへの期待、⑨子どもの健康状況、⑩本学の魅力である。これらの項目を設定した主な理由は、これらの問題を明らかにすれば、本学に在学している中国人留学生保護者の現状を把握し、本学の中国人留学生に対する教育内容、指導方法、学習環境、奨学金授与などの問題を研究し改善する根拠を収集するという調査の目的が達成できるだけでなく、本報告の冒頭に述べた本学が抱えている問題の原因を究明でき、問題解決の糸口が見つかるかもしれないと考えたからである。

4. 調査結果

以下にその調査項目(Q)と回答結果(図表)を示しながら、その結果から見えたものを解析していく¹⁾。

表1 Qあなたと子どもの続柄を教えてください。

選択肢	人数	比率
父親	43	29%
母親	101	70%
その他	1	1%

アンケート回答者の70%が母親である。本学

の中国人留学生の教育に深くかかわっているのが母親である可能性が高い。

表2 Q子どもの父親及び母親の年齢を教えてください。

選択肢	父親		母親	
	人数	比率	人数	比率
40未満	0	0%	0	0%
40～44	1	1%	3	2%
45～49	35	24%	66	46%
50～54	73	51%	61	42%
55～60	27	19%	12	8%
61～64	6	4%	3	2%
65～69	0	0%	0	0%
70以上	2	1%	0	0%

45歳～54歳の父親が75%、母親が88%を占めている。この年齢層の中国人は、文化大革命が終息を宣言した頃の1970年代に生まれ、市場経済重視、学歴重視へ転換する1980年代に学生時代を過ごし、改革開放が推し進められ、経済成長が一気に加速した1990年代に就職した人が多い。彼らは生活や仕事における知識や学歴の重要性を自分の経験で十分わかっており、自分の成功をどうしても子どもに再現させたいのに対し、自分の失敗をどうしても子どもに味わさせたくない世代だと言われている。そのため、子どもの教育を成功させたいのであれば、どんなことでも協力する世代だとも言われている。すなわち、大学が留学生教育における必要に応じて保護者の協力を求める場合、本学の保護者は協力してくれる可能性が高いということである。

表3 Q子どもの父親及び母親の最終学歴を教えてください。

選択肢	父親		母親	
	人数	比率	人数	比率
中学校卒業	5	3%	13	9%
高校卒業	19	13%	15	10%

中専・技術学校卒業	8	6%	18	12%
大専卒業	41	28%	44	30%
大学卒業	57	35%	48	33%
修士修了	13	9%	5	3%
博士修了	2	1%	2	1%

大専を含む大学以上の学歴を持っている父親が73%、母親が67%を占めている。それは、大学進学率が非常に低い1980～1990年代の激しい大学入試競争を勝ち抜いたエリートの保護者が多いということの意味している。前項の結果が示したように、本学の保護者のほとんどは、1980～1990年代に学生時代を過ごした。SciencePortal China (2016)によると、1990年の大専を含む中国の大学進学率がわずか3.4%しかなかったという。本学の中国人留学生保護者の多くはその3.4%に含まれている。

表4 Q子どもの父親及び母親の職業を教えてください。

選択肢	父親		母親	
	人数	比率	人数	比率
会社員	45	31%	50	35%
公務員	18	12%	11	8%
教員	9	6%	11	8%
個人経営者	21	15%	19	13%
会社経営者	30	21%	19	13%
医療従事者	3	2%	5	4%
軍隊・警察・法律従事者	6	4%	2	1%
農業従事者	0	0%	1	1%
その他	13	9%	19	13%
無職	0	0%	8	6%

会社員の父親が31%、母親が35%で最も多いが、経営者の父親が合計で36%、母親が26%もいる。夫婦共働きの家庭が多く、専業主婦が6%しかいない。前項の結果で明らかになったように、本学の中国人留学生の保護者の多くは、大学進学率が3.4%しかない文化大革命終結直後の時代に大学進学を成功させたエリートであるため、経営者を除く会社員であって

も、45歳～54歳の方は、普通すでに会社の中堅である管理職の会社員となることが多いと言われている。すなわち、本学の中国人留学生の保護者には、管理職の会社員及び経営者が多いという可能性を示している。中国の企業経営者及び管理職の特徴の一つとして、上から目線の命令形の口調で人とコミュニケーションを取る傾向があると言われている。家族も例外ではなく、いわゆる「権威型」の親が多い。このことにより、子どもとコミュニケーションを取る際、特に子どもが問題を起こした際の話合いの場合にもこの傾向が現れるのであれば、子どもとうまくコミュニケーションを取れない可能性もある。ここ数年の実例を見ると、子どもの出席不良の状況を知らされた親が子どもを叱った後、子どもに逆切れされてしまい、親からの連絡を拒否してしまう実例があった。親から一方的に高圧的な態度で責められ我慢できなくなった子どもが言う。このことにより、保護者の協力を求める際に子どもと適切な話し方でコミュニケーションを取るよう助言したほうがいいのかもわからない。

表5 Qあなたの家庭の居住地はどこですか？

居住地	GDP順	人数	比率
上海	10	19	13%
江蘇	2	15	10%
広東	1	15	10%
山東	3	13	9%
遼寧	16	8	6%
浙江	4	8	6%
河南	5	8	6%
北京	13	6	4%
四川	6	6	4%
湖北	8	6	4%
湖南	9	5	3%
内モンゴル	22	4	3%
河北	12	3	2%
山西	21	3	2%
吉林	26	3	2%
福建	7	3	2%

貴州	20	3	2%
雲南	18	3	2%
重慶	17	2	1%
黒竜江	25	2	1%
安徽	11	2	1%
江西	15	2	1%
陝西	14	2	1%
新疆	24	1	1%
香港		1	1%
その他		1	1%

2021年度香港、マカオ、台湾を除く中国大陸31省のGDP順位を見ると²⁾、GDP順位が上位の省、すなわち、裕福な省に居住している保護者が多い。法務省(1999)のデータによると、1980年代～1990年代の中国人留学生は、遼寧、吉林、黒竜江の東北三省からの出身者が最も多く、その中には出稼ぎを目的とする留学生も多かった。今はその時代と全く異なる様相を呈している。

表6 Qあなたの家庭のおおよその世帯収入(人民元)はいくらですか。

選択肢		人数	比率
人民元	日本円換算 ³⁾		
5万～10万	97.5万～195.0万	4	3%
11万～15万	214.5万～292.5万	6	4%
16万～20万	312.0万～389.8万	9	6%
21万～25万	409.3万～487.2万	22	15%
26万～30万	506.7万～584.7万	20	14%
31万～35万	604.2万～682.2万	17	12%
36万～40万	701.7万～779.6万	19	13%
41万～45万	799.1万～877.1万	7	5%
46万～50万	896.6万～974.5万	10	7%
50万以上	974.5万以上	30	21%

年収974.5万円以上の家庭が最も多い。中国政府統計局(2022)のデータによると、2021年の中国人一人当たりの所得中央値は47412元、夫婦合計は94824元(約184万円)である。本学の中国人留学生保護者には、世帯年収184万円未満の家庭はわずか3%未満であり、97%は中

国人の所得中央値を超えている。それだけでなく、厚生労働省（2020）が調査した2019年度日本人の1世帯あたりの所得中央値437万円を超えている本学の中国人留学生の家庭は少なくとも72%を占めており、437万円未満の家庭は28%以下しかない。

表7 Q学費を除き、子どもへの生活費は毎月いくらですか？

選択肢		人数	比率
人民元	日本円換算 ⁴⁾		
5千未満	9.7万未満	6	4%
5千～1万	9.7万～19.4万	74	51%
1万以上	19.4万以上	37	26%
決まっていない。頼まれたら渡す		28	19%

96%が少なくとも毎月9.7万円以上の生活費を子どもに送っている。学費12.5万円（本学の年間学費は150万円）を足すと、毎月の仕送り額は少なくとも22.2万円になる。日本学生支援機構（2020）によると、1ヶ月あたり9万9,716円が2018年度日本の大学生の仕送りの平均額であるため、本学の96%の中国人留学生の1ヶ月の仕送り額は日本人の平均仕送り額の2倍以上ということになる。

表8 Q子どもへの生活費の仕送りの方法は何かですか？

選択肢	人数	比率
子どもの日本銀行口座へ送金	88	61%
中国から持参	4	3%
銀行やコンビニのATMで親の中国銀行口座から引き出す	52	36%

子どもの日本の銀行口座へ定期的に送金する61%が最も多いが、子どもが自由に親の口座から出金できる36%も注目すべき点である。中国の銀行の親子キャッシュカード（親も子どもも同じ口座、キャッシュカードだけ別）を持たせて、子どもが必要な時に必要な金額を中国の銀行と提携している日本の銀行で自由に現金を下ろすことができるという点から、一部の

保護者が子どもを甘やかす一面と経済力のある一面が見られる。

表9 Q子どもへの生活費の仕送りの頻度はどのくらいですか？

選択肢	人数	比率
毎月	62	43%
半年か数か月一回	51	35%
決まっていない。頼まれたら渡す	32	22%

定期送金の78%が最も多いが、22%の金額制限なしの「頼まれたら渡す」ことも無視できない点である。前項の結果と同じ理由で、一部の中国人留学生は甘やかされ放題で、何の桎梏も嵌められることもなく留学生活を送っている可能性がある。その主な理由は親の過保護にあるかもしれない。筆者（2019）の調査によると、本学の一部の保護者は来日後の子どもに対しても次のような過保護な言動を取っていることが分かった。それは、いつも子どものやるべきことを代行しようとしている、いつも子どもの要求を叶えようとしている、いつも子どもに自分の意思を押し付けようとしている、いつも子どものミスを庇おうとしているということである。子どもに頼まれたらすぐにお金を渡すという行動はまさにその過保護の一つの証明である。親の過保護は一部の中国人留学生の節度を欠く金銭使用につながってしまう可能性がある。

表10 Q子どもの学費はどなたが負担していますか？

選択肢	人数	比率
両親	139	96%
子ども自身	0	0%
両親+子ども	5	3%
その他	1	1%

96%の両親が子どもの学費を全額負担している。1980～1990年代の中国人留学生の親は、子どもを海外へ送り出したらすべて子どもの

努力に任せることしかできず、学費や生活費を援助する経済力はほとんどなかった。そのため、中国人留学生たちは、長時間のアルバイトや奨学金などに頼って学費や生活費を賄うことしか方法がなかった。現在はその時代と全く異なっており、中国人留学生が学費を払えない時代、または日本で働いて学費を稼ぐ時代はすでに終焉を迎えたと言えるかもしれない。

表11 Q子どもの生活費はどなたが負担していますか。

選択肢	人数	比率
両親	124	86%
子ども自身	2	1%
両親+子ども	18	12%
その他	1	1%

学費のみならず、86%の両親が子どもの生活費も全額負担しており、子ども自身で生活費を負担しているのは1%しかいない。これはほかでもなく、中国人留学生の親の高い経済力の証明であり、且つ子どもに苦勞をさせたくない中国人の親心の証明でもある。

表12 Qあなたの家庭にとって、子どもの日本留学費用は負担になりますか？

選択肢	人数	比率
負担にならない	53	37%
少し負担になる	78	54%
重い負担になる	14	10%

重い負担になると感じたのがわずか10%に過ぎない。日本労働組合総連合会（2015）によると、日本の大学生・院生の保護者は、「大学在学中の教育費」について「重い負担である」と感じるのが78.2%であり、本学の中国人留学生の保護者より7.8倍も多い。この結果は第6項目の中国人留学生の保護者の世帯年収の高さによっても裏づけられている。要するに、本学の多くの中国人留学生の家庭は奨学金などの経済支援が必要ない裕福な家庭である。

表13 Q子どもは現在アルバイトをしていますか？

選択肢	人数	比率
はい	30	21%
いいえ	115	79%

79%がアルバイトをしていない。この結果は筆者が毎年4月に行われている中国人新入生アンケート調査の結果と比べても大差が見られない。2018年から2021年までの四年間の調査結果の平均によると、90%の中国人留学生は「アルバイトをしていない」。しかも、「これからする予定もない」という留学生も少なくない。アルバイトをしない主な理由は「お金に困っていない」、「勉強に専念したい」、「疲れるから」、「アルバイトする意味が分からない」という学生の考えに対し、アルバイトをしている少数派の主な理由は「親の負担を少しでも軽減させたい」、「日本語の練習のため」、「日本社会を知りたい」などと語る留学生もいるが、「いろいろなところに遊びに行きたい」、「好きなものをもっと買いたい」、「ペットを買いたい」、「ペットの餌代のため」と述べた留学生のほうが多かった。これはほかでもなく、前述した本学の中国人留学生の中では、アルバイトをしなくても日本で暮らせる裕福な家庭の出身者が多いということの証明である。中国人留学生が出稼ぎのために日本にやってきたという言説は少なくとも本学の中国人留学生に当てはまらない。多くの中国人留学生が出稼ぎのために来日し、毎日アルバイト漬けという時代はすでに終わったかもしれない。

表14 Q子どものアルバイトについて、あなたの意見は何ですか？

選択肢	人数	比率
しなくていい、勉強に専念してほしい	16	11%
独立生活能力を鍛えるために適度にしてほしい	126	87%
家の負担を減らすためになるべく多めにして生活費を稼いでほしい	1	1%
家の負担を減らすためになるべく多めにして学費と生活費を稼いでほしい	2	1%

子どもの独立生活能力を鍛えるために適度にアルバイトをしてもいいと考えている保護者は87%を占めているのに対し、家庭の負担を減らすためにアルバイトをたくさんしてほしいと思っている保護者はわずか2%に過ぎない。第12項目では、子どもの日本留学費用は重い負担だと感じている保護者は10%を占めているが、子どもにアルバイトを多くしてほしいと考えている保護者の3%に比べて、7%も少ない。これはたとえ自分は苦労しても子どもには苦労させない中国の一部の親の気持ちの表れだと考えられる。ある親は「一人っ子なので、アルバイトしたことがない。日本でアルバイトをさせるなんて考えたことがない。自分はいくら苦しくでも絶対子どもにアルバイトをさせたくない。勉強に専念すれば良い。」とインタビューで心境を語った。

表15 Qあなたの子どもは一人っ子ですか？

選択肢	人数	比率
はい	110	77%
いいえ	32	23%

一人っ子が77%で最も多いが、子育て費用の高騰などの原因がもたらした一人っ子政策廃止後も二人目の子どもを出産したくないと指摘されている中国の社会現状の中、23%が一人っ子ではないとは、複数子どもを育てられる経済力がある証明の一つである。他方、他人とどのように協働するのか、どのように協調するのか、どのように競争するのかなどの他人と

のかかわりあい方がわからず、家庭の中では常にナンバーワンの地位を独占すると言われて一人っ子が77%を占めているが、そうでもない留学生は23%もいる。

表16 Q普段子どもと連絡を取る手段は何ですか？

選択肢	人数	比率
WeChat	126	87%
QQ	16	11%
電話	2	1%
電子メール	0	0%
その他の方法	1	1%未満

98%の保護者は中国の無料通信アプリ(WeChat、QQ)を子どもと連絡を取る手段として使用しているのに対し、電子メールを使う人は一人もいない。保護者のほとんどは無料通信アプリを子どもと連絡を取る手段として使用していることは、子どもと即時にコミュニケーションを取ることができるということを意味している。これは教育上の必要に応じて大学が親の協力を求めることができる前提となっている。言い換えれば、保護者の協力を求めることができる物理的な条件が揃っていることである。

表17 Q普段子どもと連絡を取るのとはどなたですか？

選択肢	人数	比率
父親	30	21%
母親	114	79%
その他	1	1%未満

79%の母親は普段子どもとの連絡係を担っているのに対し、父親は21%しか占めていない。この結果は現在中国の実情を明らかに反映していると言える。「中国家庭親子付き添う白書」(2017)によると、55.8%の家庭では普段子どもに付き添うのは母親であり、父親が付き添うのはわずか12.6%しかいない。言い換えれば、普段子育てや子どもの教育を行うのが主に母親である中国の実情は本学の中国人留学生

の家庭でも反映されており、母親が子どもと親密に話せる相手である可能性が高い。大学側が保護者の協力を求める際には母親に依頼したほうが効果的であるかもしれない。

表18 Q子どもと連絡を取る頻度はどのくらいですか？

選択肢	人数	比率
ほぼ毎日	38	26%
週2~3回	43	30%
週1回程度	51	35%
2週間1回程度	9	6%
月1回程度	2	1%
用事がなければ、 普段連絡しない	2	1%

92%が少なくとも週1回以上子どもと連絡を取っており、そのうちの26%はほぼ毎日子どもと話をしている。日本留学中の子どもを心配し、常に知りたい、話したいという親の気持ちが目に見える一方、親子コミュニケーションの間隔が短いことは親子関係の親密性が強いことも明らかである。大学からの情報発信に対して、留学生の反応が鈍い場合、大学が保護者を通じて学修や生活に支障を与えないように留学生を動かす条件も整っていると考えられる。

表19 Q子どもと会話する主な内容は何ですか？(最大三つ選択可)

選択肢	人数	比率
日常生活のこと	54	20%
学校のこと	26	9%
子どもの進路	37	14%
子どもの不安や悩み	27	10%
子どもの勉強のこと	48	18%
特定の話題がない雑談	82	30%

特定の話題がない雑談や日常生活のことが50%で最も多い。例えば、「ご飯食べた?」、「体調は大丈夫?」、「疲れていない?」、「勉強はどう?」、「お金は足りている?」というような些細な日常生活の話題である。さりげない会話が

親子の絆を中国にいた時と同様に保ち、双方がその会話から安心を得られると考えられる。しかし一方、中国人留学生が一人で羽ばたきたいのに親が子離れしたくないという矛盾も明らかになっている。筆者(2018)の美術系中国人留学生の特徴に関する研究によると、毎週親と連絡を取っている人の86%は「ほとんど親から連絡してくる」という。中国人留学生の親たちが自ら頻繁に子どもに連絡する主な理由は、「心配している、子どもの無事を確認したいから」、「子どものすべてを知りたいから」、「中国国内にいた時いつも子どもを監督していたので、日本にいてもリモートコントロールしたいから」、「寂しいから、子どもの声を聴きたいから」と保護者たちは語っている。それに対して、留学生たちは、「やっと親から離れることができたのに、いちいち近況を報告しなければならない、面倒くさい」、「自分の近況を報告しないと、親が狂ってしまい、日本に飛んできそうなので、仕方ない」という人が多い。

表20 Q毎回子どもと話をする時間はどのくらいですか？

選択肢	人数	比率
30分未満	52	36%
30分~60分	74	51%
60分~120分	17	12%
120分以上	2	1%

1時間程度の会話が最も多い。これは国際電話しか使えない時代ではできないことであり、無料SNSは親子の絆の弱体化を防ぐ道具になっていると言える。筆者の経験によれば、1990~2000年代では、中国人留学生と家族との連絡手段は主に国際郵便(手紙)であり、国際電話による音声での会話は非常に高価のため、月一回、毎回5分程度の通話が一般的であった。その時代の国際郵便が中国の上海、北京などの大都会に届くのは早くでも一週間程度かかり、地方都市や農村への到着はさらに時間がかかる。そのため、親子の情報伝達の速度が遅

く、親子コミュニケーションも希薄になってしまい、親子の絆も弱体化になってしまうケースが多い。しかし、2011年の無料通話アプリ WeChat（中国語名：微信）登場、普及により、状況が一変した。情報伝達や連絡が速い、会話時間を気にする必要もない、音声のみならず、ビデオ会話も気軽にできるようになっている。この意味で、無料SNSがもたらした情報伝達の速さ、時間の長さ、内容の豊富さ及び会話の可視化などにより、親子コミュニケーションの密度を高め、親子の絆の弱体化を防いでいると言える。

表21 Q子どもの日本留学を最初に言い出したのはどなたですか？

選択肢	人数	比率
両親	25	17%
子ども	120	83%
その他	0	0%

83%の子どもが自らの意思で日本留学を希望している。明確な留学目的を持ち、学習意欲が高い人が多いことを示している。しかし、17%が自分の意思ではなく、親に無理やり日本留学を強いられたことも無視できない。学習意欲低下、出席不良の学生はほとんどこのような親の意思で留学させられた学生であることが毎年の留学生個人面談で明らかになっている。親の意思で日本留学をさせられた学生の学習や生活に問題が起きた場合、それらの学生を適切に指導すると同時に、必要に応じて彼らの親に協力を求めたほうが円滑に問題解決できるかもしれない。

表22 Q日本留学を言い出した人は、いつ頃からそれを考え始めたのですか？

選択肢	人数	比率
子どもが幼稚園の頃	1	1%
子どもが小学生の頃	2	1%
子どもが中学生の頃	19	13%
子どもが高校生の頃	74	51%
子どもが高校卒業後	49	34%

高校卒業前にすでに日本留学を考え始めた66%に対し、中国での大学進学が成功しておらず、日本で活路を探すために留学する人が34%を占めている。すなわち、苦しい時の神頼みではなく、高校卒業前にすでに日本留学を目標として目指しており、目の前のことだけでなく、人生の長期プランをあらかじめ持っている親及び留学生が多いと考えられる。

表23 Q子どもの日本留学を支持する主な理由は何ですか？（最大三つ選択可）

選択肢	人数	比率
子どもが日本の漫画アニメが好き	124	54%
子どもに日本の大学で勉強してほしい	21	9%
子どもの中国大学受験の結果が良くない	4	2%
子どもに日本で就職してほしい	10	4%
子どもに留学を通じて日本に移住してほしい	6	3%
日本留学を通じて子どもの独立生活能力を鍛えたい	65	28%

54%の子どもが日本の漫画アニメが好きを理由に子どもの日本留学を支持している。日本の漫画アニメ文化が中国の若者とその親に与えた影響は日本留学の促進剤になっていると思われる一方、親が子どもの希望をどうしても叶えてあげたいという過保護の一面も覗かせる。インタビューに応じたある親が「幼稚園のごろから見た日本のアニメ『クレヨンしんちゃん』がきっかけだった。それ以来、日本の漫画・アニメの大ファンになり、高校卒業したら絶対日本に行ってアニメを勉強したいとずっと言っていたから、子どもの夢の実現に応援したい。本当は経営・管理分野を勉強してほしいが、子どもの夢を壊したくないから。」と胸の内を明かした。

表24 Q子どもは中国の大学統一入学試験（高考）を受験しましたか？

選択肢	人数	比率
はい	84	58%
いいえ	61	42%

42%が中国の大学入学試験を受けておらず、中国での大学進学を予定することなく、最初から日本の大学で学習することを決意した可能性が高い。表19では、高校卒業後に日本留学を考え始めたのが34%となっており、この58%の中国大学受験の数と24%の差もある主な理由は、「子どもの学力を試してほしかった」、「子どもが在学していた高校は全員大学入試に参加する決まりだった」ということだと保護者達は語っている。

表25 Q子どもは来日する前に日本の礼儀作法を勉強したことがありますか？

選択肢	人数	比率
はい	52	36%
いいえ	93	64%

64%が日本の礼儀作法などを勉強したことがないまま来日した。カルチャーショックや日本社会に合わない問題行動を引き起こす原因となる可能性がある。筆者（2021）の中国人新入留学生に対する調査研究では、保護者の回答と異なり、56%の留学生は日本の礼儀作法などの社会常識を勉強したことがあると回答しており、保護者の回答と20%の差もある。しかし、入学後の様子を見ると、多くの留学生が挨拶の仕方もわからない、約束を守らない、授業態度が悪い、間違っても謝らないなどの問題行動を引き起こしていることはまぎれもない事実である。この事実から考えれば、留学生の回答より、保護者の回答の信憑性の方が高い。来日するまでは、一部の中国人留学生は、何かを要求すれば親が応えてくれる、ミスをして親が逃げ道を作ってくれるという親の過保護のもとで育ったため、制限を知らない、度がわからない、やりたい放題という性格を養成して

しまい、他人、社会、学校のルールを無視し、自分の意のままに行動する習慣を身につけてしまう。これらの性格が日本の礼儀作法や社会常識を知らないまま来日することに拍車をかければ、問題行動を引き起こす可能性が高い。

表26 Q子どもは来日する前に日本語をどのくらい勉強しましたか？

選択肢	人数	比率
ほとんど勉強していない	7	5%
3か月程度	18	12%
6か月程度	33	23%
9か月程度	13	9%
1年程度	39	27%
1年以上	35	24%

87%が半年以上日本語を勉強してから来日した。日本での生活と学習の道具を早めに身につけて、早めに日本での学習生活に溶け込みたいという姿勢が見られており、来日後の日本語教育機関での学習時間は法務省が定めた2年間より短縮される可能性がある。2018～2021年度の本学の中国人留学生の日本語学校の在学期間を見ると、2年間は31%、2年間以上は126%、2年間未満は56.4%であることが明らかになっている。日本語学校での学習期間が短縮化されることにより留学生を受け入れている大学にどのようなメリット及びデメリットがあるかについては今後の研究課題になる。

表27 Q中国にいたとき、子どもはどのようなタイプの科目が好きでしたか？

選択肢	人数	比率
理論系	11	8%
技術系	55	38%
理論+技術系	79	54%

理論系の科目が好きなのはわずか8%しかおらず、実技が好きなのは、「理論+技術系」を含めば92%も占めている。この保護者の回答結果は中国人留学生への調査結果とほぼ合致している。筆者（2021）の調査によれば、

同様な質問に対し、4%の中国人留学生は理論系の授業を好み、96%は実技が好きと回答している。中国では、美術生が論理的な思考力や独創力などを養う文化教養科目が苦手だと言われているが、本学の中国人留学生も例外ではなかったようである。

表28 Q中国にいたとき、他人との交流において、子どもはどのようなタイプの子でしたか？

選択肢	人数	比率
他人との交流が好き	110	76%
他人との交流が嫌い	35	24%

76%は他人と交流するのが好きであるのに対し、他人と交流するのが嫌いな人は24%も占めている。一部の授業で要求しているグループ作業にどうしても参加したくない留学生はこのような性格を持つ学生かもしれない。協働作業が求められている大学の一部の科目では、どのようにして保護者と協力してこれらの他人との交流が嫌いな性格を持つ中国人留学生を授業に積極的に参加させるかが大きな課題となる。

表29 Q中国にいたとき、口頭表現において、子どもはどのようなタイプの子でしたか？

選択肢	人数	比率
話をするのが好き	93	64%
話をするのが嫌い	52	36%

話をするのが好きな留学生は64%しかおらず、36%の留学生は話をするのが嫌いという結果になっている。この結果は前項の他人との交流の結果と関連していると見られる。他人との交流が嫌いな人は口頭表現能力も欠如しており、黙々と独自作業するのが好きという美術生が多いと中国国内で言われている傾向が本学の留学生にも見られている。

表30 Q中国にいたとき、文章表現において、子どもはどのようなタイプの子でしたか？

選択肢	人数	比率
書くのが好き	87	60%
書くのが嫌い	57	40%

書くのが好きな留学生は60%、書くのが嫌いな留学生は40%いるという結果になっている。本学の中国人留学生の中には、自分の意思表示をする際に口頭言語ではなく、主に文章や作品を通じて伝達する人が少なくないようである。

表31 Q中国にいたとき、子どもはどのような勉強タイプの子でしたか？

選択肢	人数	比率
親の監督がなくても自分で勉強できる	97	67%
親の監督がなければ自分で勉強できない	47	33%

33%が親の監督がなければ自分で勉強できないという結果が明らかになった。すなわち、本学の33%の中国人留学生は自ら積極的に学習に取り組むという主体的な学習力が欠如している。学習意欲が低い本学の一部の中国人留学生に対してどのような形で指導しても学習態度が改められない理由はここにあるかもしれない。そもそも自分で勉強できない彼らは、来日前に親が常に彼らの学習を監督し、彼らの学習を牽引していたが、親元を離れて本学に入学していても、簡単に主体的な学習力を向上できるとは考えにくい。来日前の学習の性格を持ったままで本学の学修に臨めば、おそらく落第する危険性が大きいと思われる。どのようにして保護者と連携して彼らの学習をサポートするかは喫緊な課題となっている。

表32 Q中国にいたとき、子どもが好きなことは何ですか？（最大三つ選択可）

選択肢	人数	比率
読書・勉強	29	9%
漫画・アニメ	92	30%
ゲーム	36	12%
遊び	14	5%
映画鑑賞	21	7%
絵を描くこと	75	24%
ペットの飼育	12	4%
買い物	2	1%
飲み食い	3	1%
歌・ダンス	5	2%
ネット	22	7%

上位の三つは漫画・アニメ、絵を描くこととゲームとなっている。中国にいたときは親が決めたスケジュールに従って学習や生活をしてきたと多くの留学生は面談で語っていた。勉強の時間や内容はもちろん、好きなことをやる時間も制限されていたという。来日後に親の監督がなくなり、その趣味に没頭し、学習より多くの時間を趣味に費やしてしまう一部の留学生が出てくるに違いない。なぜなら、在学中の中国人留学生の中には、そのような学生がすでに存在しているからである。大好きなゲームをこれから遊ぶ側から作る側へ変わることを決意し、今まで親の制限で遊べなかった分も合わせて作る側へ進む前にまず思い切って遊ぼうと決めたある学生は、大学に入った後の時間は、授業のほか、ほとんどゲーム遊びに費やした。朝4時前後まで遊ぶのが日常茶飯事となり、目を覚ますとお昼の12時前後になることが定番の生活スタイルになった。そのせいで、午前の授業はほとんど来ることができなくなった。親の監督がなくなり、学習と趣味の優先順位を逆転させてしまった留学生をどのようにして親と協力して指導するかは大きな課題となる。

表33 Q子どもが宝塚大学を選択した主な理由は何ですか？（最大三つ選択可）

選択肢	人数	比率
勉強したい分野・学科があった	129	39%
合格できそうな大学・学科だった	15	4%
日本語学校の先生が勧めてくれた	38	11%
家族の推薦だった	2	1%
就職がよさそうだったと思った	9	3%
授業の内容がいいと思った	37	11%
キャンパスの場所がいいと思った	43	13%
家からの通学が便利だと思った	4	1%
教員が魅力的だと思った	35	10%
学生生活が楽しそうだったと思った	6	2%
ほかの大学が不合格だった	10	3%
特に理由がない	7	2%

「勉強したい分野・学科があった」が最も多い。これは前項の「漫画・アニメは子どもが好きなことのトップワン」という結果に強く関連していると見られる。宝塚大学は漫画、アニメ、イラスト、ゲーム、メディアデザインという中国人留学生の趣味と合致している分野があるため、中国にいたときの趣味を将来の仕事としたいから本学を選択したと考えられる。これはほかでもなく、本学の多くの中国人留学生の目標意識が高いことを示していることだと思われる。

表34 Q子どもが大学を決定した際に主にどなたの意見を参考にしましたか？

選択肢	人数	比率
両親	2	1%
日本語学校の先生	38	26%
塾の友達	6	4%
T大学の友達	0	0%
自分	99	68%

68%が中国国内の親の意志で大学を決定するのではなく、自分の意志で進学先を決めた。中国の一人っ子たちは、家庭の中心的存在であり、家族の溺愛の下で育ち、欲しいものがすべて手に入るような何一つ不自由のない生活を送っているとよく言われているが、生活

の面においては子どもの言いなりになる親が、子どもの将来にかかわる勉強や進学などを直面する際に子どもの意見を聞かずに親が良いと思うところに無理やり行かせるという傾向は、今の中国の家庭の特徴の一つだと言われている。しかし、保護者の調査データを見ると、68%の留学生は自分で本学への入学を決めた。「今までは何もかもすべて親が自分の意思を無視して決めたので、親を離れた今は自分で決めたい」と多くの留学生は言う。それに対して「もう少し私たちの意見を聞いてほしかった。」「大学を決めてから知らされた」と寂しそうにインタビューに応じてくれた一部の保護者が言う。そして、24%が自分の進学先の選定を日本語教師に委ねることも明確である。言い換えれば、日本語学校の教師の助言は中国人留学生の進学において非常に大きな役割を果たしていると考えられる。

表35 Q子どもは大学を選択した際に最も役に立った情報はどれでしたか。

選択肢	人数	比率
大学のパンフレット	9	6%
大学のホームページ	28	19%
オープンキャンパス	29	20%
進学説明会	17	12%
日本語学校の先生	31	21%
在学中の友達	11	8%
両親	0	0%
その他	19	3%

日本語学校の先生からの情報が最も役に立っていることが明らかになっている。この結果は前項の結果と合わせて考えると、中国人留学生に最も信頼されているのは日本語教師からの情報だと結論付けることができるかもしれない。いかにして日本語学校の教師に本学をアピールし、日本語教師を通じて多くの中国人留学生に本学の良さを理解してもらうかは今後の検討課題となる。

表36 Q子どもが宝塚大学に在学中に、あなたは子どもに一番期待しているのは何ですか。

選択肢	人数	比率
将来に役立つ教養や知識を身につけること	108	74%
サークル・ボランティア活動に参加すること	3	2%
友達や先生など多くの人に会うこと	7	5%
課外の旅行やアルバイトをすること	1	1%
専門分野の知識・理解を深めること	22	15%
日本語能力を高めること	3	2%

74%の保護者が在学中の子どもに将来に役立つ教養や知識を身につけてほしい。すなわち、子どもの就職や仕事につながるスキルをアップし、無事に就職できることが中国人留学生の親が子どもに一番期待していることである。

表37 Qあなたは子どもにどのような最終学歴を取得してほしいと希望していますか。

選択肢	人数	比率
大学卒業	33	23%
修士課程修了	92	63%
博士課程修了	20	14%

「修士課程修了」と「博士課程修了」を合わせると、77%の保護者が大学院修了の最終学歴を子どもに期待している。これは大学院への進学に必要な経済力があることを証明していると同時に、現在中国の就職事情に応じた親の切なる願いとも読み取れる。NESポストセブン(2022)によると、中国の2022年度の大学院修士課程志願者数が過去最高の457万人に達している。受験生が就職活動の競争は大変だと考え、競争力をつけるために大学院進学を選択したと指摘している。将来の就職活動において、少しでも競争力を高めてほしいことは、子どもの大学院進学を希望する親の気持ちだと考えられる。

表38 Q大学に在学中の子どもがわからないことや悩みがあるときに、あなたはどなたに相談してほしいと思いますか。

選択肢	人数	比率
日本人教員	66	46%
中国人教員	45	31%
日本人友達	3	2%
中国人友達	23	16%
その他	8	6%

「日本人教員に相談してほしい」が46%で最も多い。言葉や文化の相違がないため、中国人教員の方が相談しやすいと思われがちだが、そうとは限らないようである。その主な理由は、せっかく日本の大学に留学しているので、日本人の教員に何もかも相談して、日本語や日本人の考え方で指導してほしいと一部の保護者は語っている。しかし他方、自分の意思をうまく伝えるかどうかは非常に心配、うまく伝えられずに、または誤解されると問題解決にならないので、最後は中国人教員にかばってほしいと一部の保護者も言う。

表39 Qあなたは子どもの卒業後の進路についてどう考えていますか。

選択肢	人数	比率
日本で長期働く	18	12%
すぐ中国に帰国し働く	27	19%
日本で数年働いてから中国に帰国	47	32%
大学院進学	49	34%
留学・就職以外の在留資格へ変更	4	3%

大学院進学が最も多いが、「すぐ中国に帰国」と「日本で数年働いてから中国に帰国」を合わせると、卒業後に中国に帰国してほしいが51%も占めている。表15の結果にも示したように、本学の中国人留学生の中では、一人っ子が77%もいるため、最終的にその一人の子どもが自分のそばにいてほしいという中国の親の気持ちがこのように表れているからだと考えられる。

表40 Q大学に在学中の子どもに対して最も心配していることは何ですか？(最大三つ選択可)

選択肢	人数	比率
日本語力がついていけるかどうか	41	11%
新しい環境に適応できるかどうか	39	11%
授業の内容を理解できるかどうか	88	24%
仲のいい友達ができるかどうか	21	6%
学費が払えるかどうか	0	0%
在留資格が更新できるかどうか	4	1%
卒業後就職できるかどうか	60	16%
大学での相談相手がいるかどうか	25	7%
体が健康かどうか	85	23%
その他	6	2%

トップ「授業の内容を理解できるかどうか」で24%を占めており、その次は「体が健康かどうか」で23%を占めている。子どもの勉強と健康状況は最も心配されているが、学費を心配している保護者はいないという結果が明らかになっている。

表41 Q子どもはうつ病などの精神的な疾患を患ったことがありますか。

選択肢	人数	比率
以前はあったが今はない	11	8%
以前もあって今もある	5	3%
以前はなかったが今はある	3	2%
以前もなく今もない	126	87%

87%が精神的な疾患を持っていないが、13%の経験者や罹患者も軽視できない。環境の変化による再発や発症する留学生のメンタルのケアが課題となる。2018～2021年度において、隠れうつ病の人を除き、確診されただけでも約5%の中国人留学生はうつ病を発症している。パニック障害、対人コミュニケーション障害が併発するケースも多い。これらの精神的な病は、授業に出席できない、他人と話すことができない、課題を見ると過呼吸になるなど、中国人留学生の日本留学生生活に多大な悪影響を与えている。しかし、長期休養を余儀なくされる留学生のほとんどは、日本での休養を希望する

が、「留学」という在留資格を持っている以上、留学に適する在留活動を行わなければならない。大学側は日本の入国管理の規定に従いつつ病を発症した学生に対して帰国治療などのアドバイスをすると、留学生は刺激され、病状がさらに悪化し、自傷行為を行うことも想定される。法律のとおり対応するのか、留学生の身心を配慮するのか、このジレンマからの脱出は非常に困難だと思われる。しかし、大学はこの問題を直視しなければならない。なぜなら、大学は留学生の身心の休養の場ではないからである。いかにして保護者と連携し心身不調の留学生をサポートするかは大きな課題となる。

表42 Qあなたにとって宝塚大学の一番の魅力は何だと思っていますか。

選択肢	人数	比率
教育方針・カリキュラム	78	54%
教師陣	18	12%
校内設備	2	1%
場所・周辺の環境	13	9%
就職率	10	7%
保護者との交流	23	16%

トップの教育方針・カリキュラムは54%で最も魅力を感じられているが、大学と保護者の交流が教師陣や場所・周辺の環境などの項目を抑えて二番目になっていることが、今まで本学と保護者の交流や保護者向けの情報発信、保護者との連携などが保護者に認められており、求められているということの意味している。中国人留学生の保護者から見た保護者との交流、連携という本学の魅力をいかにして最大化にするかは今後の課題となる。

5. まとめ

今回の中国人留学生保護者意識調査の結果は、本学における中国人留学生への教育指導に多くのヒントを与えくれた。

1) 日本留学のスタイルについて

今回の調査結果を総体的にみると、現在の中国人日本留学、少なくとも本学に在学している中国人留学生のスタイルはすでに「放任留学」から「援助留学」へ転換したと考えられる。1980～1990年代の多くの中国人留学生は目的意識が薄く、周到な準備もないまま来日し、学習であれ、アルバイトであれ、学費であれ、生活費であれ、すべて自身の力で解決しなければならなかった。その時代の留学生の現状について、2003年に筆者が日本語学校、専門学校及び中国の留学仲介業者を対象にインタビュー調査を行ったことがある。その結果によれば、その時代の中国人留学生の来日の目的は主に自分の現状を変えたい（学歴の現状、学力の現状、人間関係の現状、仕事の現状、収入の現状、国籍の現状）、親の夢をかなえたい（親が実現できなかった夢を自分がかなえてあげたい）、日本に遊びに来たい（明確な目的がなく、ただ日本で遊びたい）という三種類に分けることができる。来日した多くの中国人留学生は、家庭が貧しく、親からの経済的な援助を受けられないため、授業に出られないほどバイト漬けになり、あるいは、当初から「出稼ぎ」目的で留学ビザを取得する学生は少なくない。学業とアルバイトを両立しているというよりも、バイトの合間に授業に出ている状態であり、就労時間制限超えが常態化しており、その中、毎日10時間、週四日間連続勤務している中国人留学生もいた。経済的に無援助のみならず、精神的にも親からの支援を受けにくい状況にあった。高価な国際電話や長時間かかる手紙を通じて親と連絡を取るしか方法がなかったその時代の留学生は、悩みや問題があったとしても即時に親とコミュニケーションを取ることができなかった。筆者はこのような留学スタイルを「放任留学」と呼ぶ。しかし、本学に在学している中国人留学生の多くはそもそも日本文化が好き、本場の漫画・アニメ・ゲームを勉強したいから来日し本学に入学したという明確な目的を持つ

ている。自分の現状を変えたいというわけでもなく、親が託した夢を実現したいというわけでもない。もちろん、遊ぶために日本に来たという人もいない。このように目的意識がはっきりしており、自分の好きなことを迷いなく探求していく本学の多くの中国人留学生は1980～1990年代の中国人留学生と異なる性格を示している。これは自分を中心とする裕福な家庭で育てられ、自分のやりたいことを何でもやりたがっているという性格の特徴を表しているほか、彼らが幼い頃から受けてきた日本の漫画・アニメ・ゲームなどの日本文化の影響が彼らを日本留学に導いたということも意味している。さらに最も大事なのは、保護者の精神的な支えや経済的な援助をあまり受けない「放任留学」と異なり、多くの中国人留学生は明確な目的を持ち、周到な準備に基づいて来日し、学習や生活のほぼすべてにおいて来日前とほとんど変わらずに保護者の絶大な精神的な支え及び経済的な援助を受けている。筆者はこれを「援助留学」と呼ぶ。「放任留学」から「援助留学」へ転換を促した要因は通信手段の発達と保護者の経済力の向上だと考えられる。

2) 無料通話アプリの役割について

無料通話アプリWeChatなどの通信手段を使用することにより、来日後の親子の絆は「放任留学」時代のように話せない、会えない、知らないために弱まることなく、来日前とあまり変わらない状況にある。本学の中国人留学生親子間のコミュニケーションの速さ、頻繁さ、豊富さ、長さなどは1980～1990年代と全く異なっている。親子間のコミュニケーションがよく取れていることで、親が子どもの状況を即時に把握でき、子どもも随時自分の悩みや不安を親に相談し、解決の方法を助言してもらうことができる。この意味で、SNSは留学中の親子の絆の弱体化を防ぐ道具になっている。これは留学生の絶大な精神的な支えとなり、親からの最も大きな援助となっている。李文・陳全 (2020)

は2010年以後に来日した中国人留学生は、中国本土のSNS（微信）が日本でも利用されることによって、親子関係を中心とするパーソナル・ネットワークの文化的閉鎖性が留学先でも増幅していると指摘しているが、SNSによって安定化された親子関係は日本留学が円滑に行われる一因となる一面もある。親からの精神的な支えを受けるのみならず、経済的な援助も来日前とあまり変化することなく、むしろ、より一層自由に金銭を使用できるようになっている。多くの中国人留学生は学費や生活費を心配する必要がなく、一意専心に希望する分野の学習に力を注ぐことができる状況にある。

3) 主体的な学習力の欠如について

しかし、調査結果からは「援助留学」における一部の中国人留学生が主体的な学習力が欠如していることも明らかになっている。「親の監督がなければ自分で勉強することができない」ことは、その典型的な例である。自ら積極的に学習に取り組むという主体的に勉強することができないため、親が最も心配しているのが「授業の内容を理解できるかどうか」という結果も理解できる。主体的な学習力の欠如は、学習意欲低下、出席不良、留学失敗などにつながる可能性がある。主体的な学習力の欠如のみならず、他人とのコミュニケーションが嫌い、口頭表現が苦手、文章表現も好きではない、メンタルが弱い、自己コントロールができないというそもそも来日前にすでに形成している独特な性格を持つ留学生が多数いることも今回の調査で明らかになった。これらの独特な性格を持つ中国人留学生、特に以下の図1「他人との交流が嫌い」の24%（表28の調査結果）、図2「話をするのが嫌い」の36%（表29の調査結果）、図3「書くのが嫌い」の40%（表30の調査結果）、図4「読むのが嫌い」の34%（2022年新入中国人留学生調査結果）、図5「自分で勉強できない」の33%（表31の調査結果）が重なる「個性留学生」⁵⁾、すなわち、他人との交

流が嫌い、話をするのが嫌い、文章を書くのが嫌い、文章を読むのが嫌い、親の監督がなければ自分で勉強できないという「個性留学生」は各学年に存在していることもわかった。来日前に形成されていたこれらの成人の独特な性格を本学の力だけで変えるのが非常に困難だと考えられる。今まで本学の一部の学習意欲低下、出席不良の留学生に対して、教職員がどのような方法を使用して教育指導しても不良の現状を変えることができない主な理由はここにあるかもしれない。これらの「個性留学生」とどのようにして向き合うべきかが本学の今後の大きな課題となる。入学前の留学生入学選抜の方法を改善し、本学の教育方針と相違する性格を持つ留学生の選別に適した合否審査基準をさらに具体化し可視化することによって「個性留学生」を減らすと同時に、入学後にこれらの「個性留学生」の性格を熟知している保護者と密に連携しサポートしていくことも必要ではないかと考えられる。保護者との連携がなければ、主体的な学習力が欠如している「個性留学生」の現状を変えることは非常に難しいと思われる。下記の図1、図2、図3、図4、図5を特別に取り上げるねらいは、これらの留学生に注目し、彼らの実情に適した教育指導の方法を全学で検討してほしいということにある。

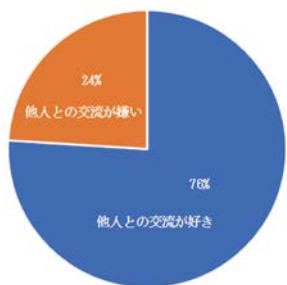


図1 Q中国にいたとき、他人との交流において、子どもはどのようなタイプの子でしたか？

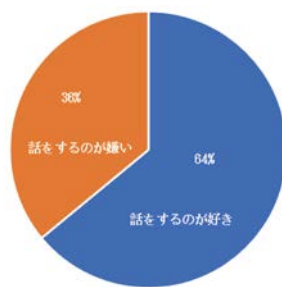


図2 Q中国にいたとき、口頭表現において、子どもはどのようなタイプの子でしたか？



図3 Q中国にいたとき、文章表現において、子どもはどのようなタイプの子でしたか？



図4 Q中国にいたとき、閲読において、あなたはどのような勉強タイプの子でしたか？

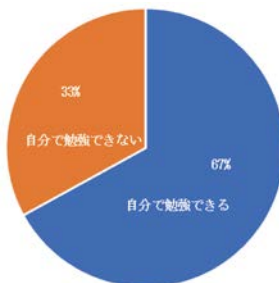


図5 Q中国にいたとき、子どもはどのような勉強タイプの子でしたか？

4) 保護者との連携について

主体的に学習するように留学生を教育するのは大学の役割に違いないが、親の監督がなければ自分で勉強できないなど、本学に入学する前にすでに形成されていた独特な性格を持つ「個性留学生」に対して、どうしても大学の力だけでは彼らの性格を変えにくいという現実と直面しなければならない。そこで、保護者と子どもの絆が強いことを利用し、保護者と連携し、保護者に協力してもらうことで、それらの問題が改善される可能性がある。

WeChatなどのSNSの発達により、今まで困難だと思われていた留学生の保護者との連携が可能となっている。この点に関しては、本学のここ数年の実践ですでに証明されている。他方、調査結果で示したように、エリート出身の保護者が多く、中国における知識や学歴の重要性を彼らはよくわかっており、子どもの留学成功に協力したいと希望する保護者が大勢いることは保護者インタビューで明らかになっている。大学は保護者と密にコミュニケーションを取りながら、必要な情報を保護者と共有することにより、今まで困難だと思われていた課題が改善される可能性があり、留学生の主体的な学習力の向上につながるかもしれない。主体的な学習能力が高い留学生に対しても、大学の情報を得られた親とのコミュニケーションを通じて、大学教育に関する共通話題が増加し、親からの適切な助言や激励は学習の促進剤になることもできると考えられる。このことにより、本学は今まで行ってきた留学生保護者と連携し留学生の学修、生活をサポートする方策を継続するだけでなく、いかにしてそのメリットを最大化にするかも早急に検討したほうがいいと考えられる。

5) 経済力とアルバイト教育について

保護者との連携のほか、アルバイトを行う教育や日本の礼儀作法を含む日本文化教育の実施も必要だと考えられる。今回の調査結果から

見ると、本学の多くの中国人留学生保護者はすでに日本人学生家庭の平均収入を超える大きな経済力を持っており、学費や生活費のためにアルバイトをしている留学生も少ない。したがって、留学生の学費減免なしという本学の学費徴収方針を変更する必要もなく、むしろ、経済的な援助が必要とされる学生への奨学金も中国人留学生を対象から外したほうがいいと考えられる。その代わりとして、経済援助ではなく、成績優秀者への激励を目的とする優秀な学業を修めた留学生への学習奨励費制度を制定しても良いと思われる。そして、今まで行ってきた過剰アルバイト防止教育を継続すると同時に、日本語力の向上や独立生活能力の訓練などを目的とする適量のアルバイトを行うための教育も必要かもしれない。また、中国においても日本語学校においても日本の礼儀作法に関する教育を受けたことがないまま大学に入学した中国人留学生に対して、複眼的な文化視点を持たせるため、何らかの形でそれに関連するプログラムを組み込むことが必要だと考えられる。最後に、中国人留学生の大学進学における日本語学校の教師の役割を重視し、留学生募集における本学と日本語教師との連携方法を検討したほうがいいかもしれない。

6) 今後の課題

今回の中国人留学生保護者に対する意識調査は、日本における初めての調査と思われ、その調査データは本学の中国人留学生保護者の現状を理解し把握することに対して非常に貴重な資料となるに違いない。しかし、これらのデータはあくまでも本学に在学している中国人留学生の保護者から得られたデータであり、これらのデータから得られた結論をすべての在日中国人留学生へ一般化することが簡単にはできるとは考えにくい。言い換えれば、今回の調査研究は、本学を対象とするケーススタディであり、その調査結果をすべての大学に適用できるとは限らない。また、それらのデータにつ

いてどのように解釈するかも研究者の視点によって変わってくる可能性がある。そのため、他大学に在学している中国人留学生の保護者をも調査し、そして他大学の研究者とともに調査データを分析することで初めて在日中国人留学生保護者の全体像を把握することができる。これは今後の課題となる。さらに、本学の保護者の現状を概ね捉えることはできたが、その現状に応じた具体的な教育指導、特に「個性留学生」に対して、保護者との連携をどのように図ったら良いかなどはまだ十分に検討されていない。これも今後の大きな研究課題となる。

注釈

- 1) 未回答の項目があるため、合計人数が合わない場合がある。パーセンテージの端数を四捨五入して計算しているため、合計100%にならない場合がある。
- 2) この順位は南方財富(2022)「2021年全国各省GDP排名2021年排行榜(完整参考版)」によるものである。
<http://www.southmoney.com/shuju/hysj/202202/22976938.html> (2022年3月9日閲覧)
- 3) 「外国為替計算Yahoo!ファイナンス」2022年12月19日のレート1元=19.5円で換算した数字。
<https://info.finance.yahoo.co.jp//fx/convert/>
- 4) 同上。
- 5) 本報告では、「他人との交流が嫌い」、「話をするのが嫌い」、「書くのが嫌い」、「読むのが嫌い」、「自分で勉強できない」という性格をすべて持っている留学生を「個性が強い留学生」と定義し、「個性留学生」と呼ぶことにする。

引用文献

1. e-Stat政府統計の総合窓口『統計でみる日本「在留外国人統計(旧登録外国人統計)

登録外 国人統計99-07-1 都道府県別本籍地別外国人登録者(その1 中国)』

<https://www.e-stat.go.jp//dbview?sid=0003147203> (2022年6月20閲覧)

2. 佚名(2017)「中国国内首份中国家庭親子伴陪白皮書」(中国国内初めての中国家庭親子付き添い白書)
https://www.sxdaily.com.cn//2017-12/27/content_1302859.html (2022年8月2日閲覧)
3. 岡本聡子(2021)「中国の出産事情 一人っ子政策廃止でも出生率が上がりず。今の中国は子供を産みにくい?生みやすい?」
<https://hanakomama.jp/birth/122768/> (2022年8月18日閲覧)
4. 黄超(2018)「家长教养方式的阶层差异及其对子女的非认知能力的影响」(保護者の教養方式の階層的相違及び子どもの非認知能力への影響)『社会』第38巻6号、pp.216-240
<http://html.rhhz.net/society/html/20180615.htm> (2022年7月8日閲覧)
5. 厚生労働省(2020)「2019年国民生活基礎調査の概況」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/03.pdf> (2022年2月18日閲覧)
6. SciencePortal China(2016)「日本と中国の高等教育機関への進学率の推移(1990-2016年)」
https://spc.jst.go.jp/data/techoverview2016/3/3_05.html (2022年2月22日閲覧)
7. 全国大学生協連(2021)「2021年度保護者に聞く新入生調査」
<https://www.univcoop.or.jp/press/fresh-report.html> (2022年7月4日閲覧)
8. 中国国家统计局(2022)「中華人民共和国2021年も区民経済と社会発展統計公報」
http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/202202/t20220227_1827960.html

- (2022年6月18日閲覧)
9. 独立行政法人日本学生支援機構「平成30年度学生生活調査結果」
http://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/2018.html (2022年8月18日閲覧)
 10. NESポストセブン (2022)「中国で大学院修士課程志願者数が過去最高の457万人就職で有利に」
https://www.news-postseven.com/archives/20220208_1724911.html?DETAIL、(2022年2月26日閲覧)
 11. 日本労働組合総連合会 (2015)「大学生・院生の保護者の教育負担に関する調査」
<https://www.jtuc-rengo.or.jp/info/chousa/data/20151120.pdf?52> (2022年2月18日閲覧)
 12. ベネッセ (2012)「大学生の保護者に関する調査」
https://berd.benesse.jp/up_images/research/data_all4.pdf (2022年7月4日閲覧)
 13. 叶不群 (2020)「为什么中国父母大多是“权威型”家长？」(なぜ中国の親の多くは「権威型」の保護者?)
<https://zhuanlan.zhihu.com/p/130395488> (2022年7月8日閲覧)
 14. 李春 (2019)「過保護の離脱における在日美術系中国人留学生の問題とその対策」『宝塚大学紀要』No.33、pp.65-86
 15. 李春 (2022)「新入中国人留学生の現状及び指導方法に関する研究」『宝塚大学紀要』No.35、pp.57-87
 16. 李文・陳全 (2020)「在日中国人留学生のパーソナル・ネットワーク：—社会階層と家族の視点から—」『社会・経済システム』39号、pp.53-60
- 『日本心理学会大会発表論文集』83号、日本心理学会、pp. 3 B-025
2. 井上恵 (2016)「在日文系中国人留学生の就業動機と就職不安の関連」『人文科学研究』第12号、pp.217-229
 3. 殷夢茜・青木紀久代 (2018)「在日中国人留学生の異文化適応に関する質的研究」『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』19号、pp.49-59
 4. 小野真・沼崎啓 (2010)「小児期の任意接種ワクチンに対する保護者の意識調査」『日本化学療法学会雑誌』58号、pp.555-559
 5. 葛文綺 (2003)「中国人留学生の適応度に影響を与える個人属性について」『学生相談研究』23号、pp.274-283
 6. 元笑予・馮蒼竹 (2017)「在日中国人留学生の異文化ストレスによる日本語学習意欲への影響：日本語学校在学の学生を対象として」『日本教育心理学会総会発表論文集』59号、日本教育心理学会、pp.484-484
 7. 吳曉良 (2017)「在日中国人留学生の友人関係構築における阻害要因：K大学在学生の事例を通して」『比較文化研究』128号、日本比較文化研究学会、pp.165-177
 8. 吳曉良 (2017)「在日中国人留学生の友人関係とその関連要因：九州大学在学生を事例に」『地球社会統合科学研究』7号、九州大学大学院地球社会統合科学府、pp.35-44
 9. 周宇磊 (2017)「中国人留学生の異文化適応に対する社会学的考察——留学生ネットワークに着目する」『社会学批評』6号、pp.37-47
 10. 鈴木正行・伊藤裕康・中村博子・符艶花・饒彩雲 (2017)「中国人留学生と日本人学生とのコラボレーションによる授業開発の意義：ESDのための社会科教材「あなたの水は大丈夫？」の開発と実践を通して」『日本教育大学協会研究年報』35号、
- 【参考文献】**
1. 安婷婷・浜村俊傑・岸本鵬子 (2019)「中国人留学生における学校ストレスと異文化適応ストレスの抑うつと不安への影響：ネガティブ気分制御期待感の調整効果」

- pp.49-63
11. 杉本香・樋口尊子 (2019) 「保育者から見た外国人保護者とのコミュニケーションにおける問題と日本語教育支援の可能性：東大阪市でのアンケート調査の結果から」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』9巻、pp.1-11
 12. 張文青 (2018) 「中国人初中級日本語学習者の漢字単語学習における意味処理過程の変容—単語シャドーイングを用いた実験的検討」『留学生教育』第23号、pp.53-62
 13. 鶴見大学・鶴見大学短期大学部 (2017) 「平成29年度新入生保護者アンケート」
<https://www.tsurumi-u.ac.jp/uploaded/attachment/1277.pdf> (2022年7月8日閲覧)
 14. 丁思琦・松田英子 (2020) 「日本語学校における中国人留学生と異文化適応」『東洋大学大学院紀要』55号、pp.1-8
 15. 藤媛媛・林萍萍 (2021) 「新型コロナウイルス感染拡大が中国人留学生に与える影響—その生活・心理・行動に着目して—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』7号、pp.47-56
 16. 湯玉梅 (2004) 「在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究—対人行動上の困難の観点から—」『国際文化研究紀要』10号、pp.293-328
 17. 濱畑静香 (2020) 「中国人留学生の日本語力の実態と問題点：物語の叙述に着目して」『皇學館大學紀要』57号、pp.174-157
 18. 費曉東 (2013) 「日本留学中の中国人上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知—中日2言語間の携帯・音韻類似性を搜索した実験的検討」『留学生教育』第18号、pp.35-44
 19. 松井めぐみ・松岡洋一・岡益己 (2011) 「中国人留学生の就職意識の特徴—岡山大学における調査から—」『留学生教育』第16号、pp.107-116
 20. 松原愛 (2013) 「中国語を母語とする日本語学習者の日本語文の繰り返し音読における分散効果—完全処理仮説による生起メカニズムの検討」『留学生教育』第18号、pp.45-54
 21. 文部科学省「平成25年度全国学力・学習状況調査 保護者アンケート調査」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/1339080.htm (2022年7月15日閲覧)
 22. 山崎てるみ・樫田美雄 (2017) 「日本的なマンガを描きたい：中国人留学生Dさんにおける異文化理解と表現の的確さおよび洗練性」『現象と秩序』6号、現象と秩序企画編集室、pp.77-93
 23. 李文・陳全 (2020) 「在日中国人留学生のパーソナル・ネットワーク：—社会階層と家族の視点から—」『社会・経済システム』39号、社会・経済システム学会、pp.53-60
 24. 李敏 (2021) 「90年代中国人留学生の日本留学の効果に関する研究：北京日本学術研究センターを例とする」『大学論集』53号、広島大学高等教育研究開発センター、pp.19-35